ローザ・ルクセンブルクのドイツ移住についての覚え書

松　俊夫

はじめに

一八九八年五月、ローザ・ルクセンブルク（Rosa Luxemburg）は、亡命地スイスを離れてドイツへ移住した。ドイツへの移住はローザの生涯の大きな転機となったものであるが、これについてローザの代表的な伝記の著者ネトル（J. P. Nettl）は、ローザがいつ移住を決意し、何がその動機となったかは分っていないとし、むしろ彼女が亡命指導者という狭い枠を逃れたいと望んでいたことにふれている。[1] 確かに決定的な資料を欠くうらみはあるが、やや立ち入って考察するならば、この点についての事情はある程度明らかにされるように思われる。その際、一つの手がかりとなるものが、一八九六年七月十二日、ローザがパリから事実上の夫ヨギヘス（L. Jogiches）に宛てた手紙の一節である。

「考えた末の結論をほんの数行に要約すると――わたしが成功して、公的な場所にでればでるほど、あなたの自尊心と猜疑心のためにわたしたちの関係は悪くなることでしょう。そのために、わたしのドイツ行きの問題について疑問をもちはじめています。よくよく考えた末

に、わたしが運動から身をひいて、何処かの穴の中であなたと仲良く暮すか、あるいは広い場での活動に従ってあなたと不和になるか、という二者択一を迫られるとすれば――わたしは前者を選びます。」(2)

これによっても明らかなように、すでにこのころ彼らの間ではローザのドイツ行きが話題となっていたが、ローザはヨギヘスの反対にあってなお強い逡巡を示していたのであった。一方、ローザは移住に先立ってドイツの市民権を獲る目的から、ドイツの亡命社会主義者リューベック（K. Lübeck）の息子グスターフ（Gustav）と形式的に結婚することになるが、これは一八九七年五月のことであったから（結婚証明書の日付は九八年四月）、彼女が移住を決意したのは、九六年の後半、あるいは九七年、それも比較的早い時期であったと考えられる。とすれば、この間の彼らをめぐる政治状況は、逡巡していたローザを移住にふみ切らせ、一方、移住に難色を示していたヨギヘスもそれを承認しなければならなかったほど、さし迫っていたものであったといえよう。それだけに移住するローザの目的意識は、複雑な心境にありながらもきわめて明確であった。一八九八年五月十四日、ベルリンに向かう途中のミュンヘンからローザはヨギヘスに宛ててつぎのように記すのである。

「わたしがいまあなたからこんなに遠いところにいることは、何と心の重いことでしょう。……わたしは元気をだして、わたしの能力の範囲でなんとかやっていこうと思っています。どんなことがあろうと、いまは自分の仕事を最後までやり遂げることをめざしています。」(3)

果してローザのいう「自分の仕事」とは、具体的に何をさしているのであろうか。そしてそれはドイツへの移住とどのように関わっていたのであろうか。そこで本稿ではこの時期のローザをめぐる政治状況にふれ、移住の動機について考えて見ることにしたい。

一、ポーランド王国社会民主党の壊滅

一八九六年前後のローザをめぐる政治状況のうち、まずとりあげなければならないことは、会議ポーランド〔ロシア領ポーランド〕における社会主義運動の状況、とくにロ

ーザらが指導していたポーランド王国社会民主党（Socjal-demokracja Królestwa Polskiego）〔以下、ＳＤＫＰと略記〕の壊滅であろう。ＳＤＫＰがポーランド社会党(Polska Partia Socjalistyczna)〔以下、ＰＰＳと略記〕の民族主義に対抗して組織されたことはよく知られているが、一八九三―九四年にはワルシャワやウッジの工業地帯を中心に一定の影響をもつ勢力として発展していたのであったから、その壊滅はローザらに大きな打撃を与えたことは疑いない。そこで以下、ＳＤＫＰがどのように発展し、また壊滅していったかを検討してみたい。(4)

会議ポーランドでは、一八八九―九二年の「プロレタリア闘争の真の春」(5)を迎えると、それまで逼塞状態におかれていた社会主義グループの間で、組織の再建をはかろうとする動きがおこり、九二年秋には各グループのゆるやかな協議団体ともいうべき中央サークル（Zentralkreis）が形成された。(6)これに対応して国外でも、亡命していた社会主義者の間で合同を目ざす気運が高まり、同年十一月十七日―二十三日、各グループの代表十八人がパリで会議を開き、在外ポーランド社会主義者同盟〔以下、在外同盟と略記〕を設立した。在外同盟は、国際主義と民族主義のグループを統合しようとするメンデルソン(S. Mendelson)の構想に基づいていたが、国際主義の立場をとって会議ポーランドで重要な役割を果していたポーランド労働者同盟が会議に代表を送っていなかったので、在外同盟の方向はおのずと民族主義の傾向を強めることとなった。会議は、近い将来に設立を予定される社会主義政党の綱領として「独立民主共和国」を要求する「草案」を採択したが、一方、在外同盟は、フランスと同盟関係にあるロシアの大使の介入をうけて本部をロンドンにおくこととなった（九三年一月）。(7)

この方針にそって、九三年一月、メンデルソンは会議ポーランドに赴き、種々奔走した結果、同年二月―三月、ポーランド社会党が結成された。これがいわゆる旧ＰＰＳ(8)で、さし当り中央サークルが指導に当ることになったが、まもなく党内では労働者を中心にポーランド労働者同盟の国際主義的伝統を維持しようとする勢力が強まったので、(9)メンデルソンの指示に基づき、在外同盟を支持する社会主義者は、九三年六月、ヴィルノ近郊で集会を開いた。この集会はＰＰＳ〔新〕の第一回大会とよばれることになるが、会議ポーランドの組織からは出席者がなく、そのうえ集会が在外同盟の定めた綱領「草案」をそのままうけいれ、かつ

第二インターナショナルのチューリヒ大会に出席する代表者の指名権を在外同盟に委ねたので、会議ポーランドの組織はこれに強く反発した。[10]

このような会議ポーランドの組織に大きな刺激を与えたのは、九三年七月、ローザらのグループがパリで、『スプラヴァ・ロボトニチャ（Sprawa robotnicza 労働問題）』誌を発行したことであった。同誌の発行は、彼らが来るべきチューリヒ大会に出席する権利を確保するとともに、ポーランドの社会主義運動を在外同盟の影響から切り離そうとする目的から出ていた。それは同誌の第一号に、ローザが無署名で発表した「ポーランド労働者階級の政治的課題」[11]に端的に示されていたが、これに呼応してワルシャワでは七月三十日、労働者を中心に旧ＰＰＳのメンバーが特別集会を開き、党名をポーランド社会民主党とする新しい組織に結集し、『スプラヴァ・ロボトニチャ』を党の機関誌とすることを声明した。[12] 一週間後の八月六日、チューリヒ大会が開かれると、ローザは『スプラヴァ・ロボトニチャ』を代表して大会に報告書を提出したが、この報告書でローザはＳＤＫＰの党名を用いていた[13]のであるから、この党名がローザの個人的な判断に基づくことは明らかである。しかし大会は周知のようにローザの代表権を承認しなかった[14]ので、これを知ったワルシャワの組織は、八月三十日、再び声明を発表して大会におけるポーランド社会主義者の態度を非難するとともに、[15] 同じ八月に結ばれた『スプラヴァ・ロボトニチャ』グループとの協定[16]を通じて同グループとの関係をいっそう緊密なものとしたのである。しかしワルシャワの組織には、政治的・思想的な方向を決定づける人物を欠いていたから、『スプラヴァ・ロボトニチャ』グループが協定を通じてしだいに影響力を強めるようになったのは自然の成り行きであった。

一八九四年三月十日―十一日、ワルシャワでは非合法のうちにＳＤＫＰの第一回党大会が開かれた。この大会は、九〇年代に開かれた同党の大会としては最後のものとなったが、これによってＳＤＫＰは正式に発足した。大会の参加者は僅か十名で、『スプラヴァ・ロボトニチャ』グループの指導者たちも、それぞれの活動に忙殺されていたため、誰一人大会に参加する者はいなかった。しかし大会はローザらによって周到に準備されていたので、採択された決議は彼らの意に添うものとなった。[17] とくに、「ポーランド再建の綱領は成功を約束された政治闘争の完全な放棄を意味

する」とした結論[18]は、ローザの理論を直接反映したものであり、PPSに対する正面からの挑戦であった。とはいえ、ローザの民族理論は党内でも完全に合意をえていたわけではなく、マルフレフスキやヴォイナロフスカ(C. W. Wojnarowska)でさえ、ポーランドの再建を真向から否定する立場ではなかった[19]。そこでローザは自らの論拠をいっそう明確なものにし、『スプラヴァ・ロボトニチャ』の影響力を強めて行かなければならなかった。ローザが同誌を単独で編集するようになったのはそのためであった。三月十一日――この日はワルシャワでSDKPの党大会が終了した――、パリに到着したローザは早々に同誌の編集に着手したが、発行部数がほぼ一、〇〇〇部に近かったから[20]、その成果はかなり期待することができたといえよう。またこの間、ローザはパリの図書館で研究資料の蒐集に当り、自らの研究を『ポーランドの産業的発展』(一八九七年)として結実させたことは周知の通りである。ローザの活動と並んで注目しなければならないのは、マルフレフスキが中部ポーランドに住むドイツ人の支持を獲ようとしてドイツ語の新聞やパンフレットを多数用意したことであった。例えば、一八九四年五月一日のメーデーに向けてのパンフレットは、八、〇〇〇部のうち二、〇〇〇部が彼によってドイツ語で書かれ、ウッジを中心に配布されたといわれるが、一方、チューリヒ大会後、会議ポーランドで組織を再建していたPPSは民族ポーランドの綱領を掲げていただけにドイツ人の反応はほとんどなく、少なくともウッジではPPSの影響は皆無に近かったといわれる[21]。

しかし彼らがもっとも力をいれたのは労働組合であった。労働組合はかつての抵抗基金(Widerstandskassen)とともに彼らがその意義を重視してきたものであったが、党大会以後、党ときわめて密接な関係に立つ労働組合が組織され、SDKPを支える原動力となった。それは九四年八月に成立した職業別労働組合(Arbeiterberufsverbände)で、その規約[22]を見るかぎり、「それぞれの組合の活動はSDKPによって任命される機関によって指導されること」(第五項)、「〔組合の〕会計報告はSDKPの機関によって監査されなければならないこと」(第八項)、「〔組合の〕収入の三分の一をSDKPの会計に支払うこと」(第十六項)、などが定められており、組合はほとんど党の機構の一部と見なしうる存在であった。このような組合を基礎としてSDKPは、時にはピクニックを装いながら積極的に活動を

続けたので、とくにワルシャワやウッジでは一定の成果を収めることができたのであった。

しかしSDKPの動静は、いち早くツァーリ官憲の探知するところとなった。その原因の一つが、皮肉にもSDKPによって一定限度維持されていた党内民主主義であった。例えば、指導者はすべての党員によって知られており、また党員となるには二人の保証人の紹介があればよかったから、警察のスパイは比較的容易に組織のなかに潜入することができたからである。その結果、党は九三年秋以来、三回にわたって検挙の波に洗われ、第一回目にはウッジの組織が暴露され、九四年初夏にはここの組織は完全に壊滅した。とくに同年秋にはラチンスキ（K. Ratyński）以下の指導部全員が、またジラルドフの組織では大多数の党員が逮捕されるという状況を迎えた。その結果、九五年秋までに党員一七二人が起訴され、二〇〇人が未決拘留の状態におかれたが、これは先に述べた労働組合の活動が軌道に乗りつつあった時期だけにその損失はきわめて重大なものがあった。[23] 以後、SDKPは若干のサークルなどを除けば、組織の名に値する存在ではなくなった。もちろん、弾圧はPPSにも及び、同じ時期に一七六人の逮捕者を出したが、彼らは非合法活動の原則を比較的厳重に守っていたので、犠牲を最小限度にとどめ、なお組織を維持することができた。そこで辛うじて逮捕を免れたSDKPの党員のなかにはPPSに参加する者も出たが、それは九六年一月六日に出されたワルシャワのSDKPの声明によっても知られる。

「われわれはここに、国内の全組織の了解をえて、われわれがPPSと合同することを決定したことを声明する。したがってわれわれは、本日をもって自立したSDKPの組織として行動することを中止する。今後もわれわれは同じPPSの組織の枠のなかで、その綱領にしたがって活動するであろう。

一八九六年一月六日　ワルシャワ

ポーランド王国社会民主党指導部」[24]

もちろん、ローザはのちにこの事実を否定するのであるが、当時の実情はおおむねこのようなものであったと見て差支えない。事実、九六年六月、ヴォイチェホフスキは、ロンドンに滞在中のPPSの同志に宛てて、ワルシャワのユダヤ人の小グループを除けば、国内にはもはやSDKPの組織は存在しないとの観測を書き送っていたのである。[25]

これらの資料がどこまで真実を伝えているかはなお検討の余地はあるにしても、九六年前半のSDKPの状況はまさに絶望的であった。しかしこの時点では、すでに述べたようにローザは未だドイツへの移住を決断していなかった——話題にはなったにしても。確かに会議ポーランドにおけるSDKPの壊滅は大きな打撃ではあったが、ローザにはなお国際的な舞台で自己の正当性を主張する機会が残されていたからである。

二、ロンドン大会をめぐって
——ヴォイナロフスカとの対立——

一八九六年のローザをめぐる政治状況のうち、つぎにとりあげなければならないことは第二インターナショナルのロンドン大会との関連であろう。

会議ポーランドにおけるSDKPの壊滅という事態のなかで、ローザはロンドン大会に向けてその努力を集中した。その一つは、九六年三月、カウツキー（K. Kautsky）に鄭重な手紙を送り、ローザの論文を『ノイエ・ツァイト』誌に掲載してくれるよう依頼したことであった。[26] いうまでもなくカウツキーは、当時、マルクス主義の碩学として知られていたから、未だ二十六歳にも充たぬローザが礼をつくしたのは当然であるが、ローザがカウツキーの要求する論文の短縮さえうけいれて掲載の実現にこぎつけたのは、手紙の内容からもうかがえるように彼女がロンドン大会を意識してのことであった。それは自己の主張をもっとも権威のある理論誌の上で展開することによって、ポーランド問題に対する社会主義者の注意を喚起し、ポーランドの社会主義運動に見られる民族主義的傾向を批判しようとする意図から出ていた。事実、ローザの論文〔「ドイツおよびオーストリアにおけるポーランド社会主義運動の新しい潮流」〕が掲載されたのを機に、同誌上でポーランド問題をめぐる論争[27]がひきおこされたのであったから、論文の掲載が実現されたこと自体、ロンドン大会への一つの布石となったのである。

ついでローザが試みたことは、ロンドン大会における代表権を確保する目的で、九六年五月、在外ポーランド社会民主主義労働者連盟〔以下、在外労働者連盟と略記〕を設立したことであった。在外労働者連盟はローザとヴォイナロフスカを幹部とし、SDKPの方針にのっとり、『『ス

プラヴァ・ロボトニチャ』の発行機関の支持」（第二項）、「在外ポーランド人労働者の間での社会民主主義的宣伝活動」（第三項）、「在外ポーランド人の社会民主主義的労働者の結集およびその連帯の維持」（第五項）などをその目的として掲げ、さらに注釈として、「オーストリアおよびプロイセンの領内では、ポーランド人社会主義者は、当該国の社会民主党と綱領上、完全に一致する必要がある」ことをつけ加えていた。[28] この注釈はいうまでもなくローザのいわゆる統合理論に基づくものであったが、同時に国内でポーランド人社会主義者の対策に苦慮し始めていたドイツ社会民主党〔以下、SPDと略記〕の支持を獲ようとする意図も含まれていた。[29] この点でも在外労働者連盟の設立はロンドン大会の一つの対策として考えることができよう。

このようにローザは着々としてロンドン大会の準備を進めていたが、まもなく在外労働者連盟の内部ではヴォイナロフスカ[30]との深刻な対立がひきおこされた。ヴォイナロフスカは、パリに亡命していたポーランド人社会主義者の間では数少ない国際主義の支持者で、SDKPの設立後、同党に参加し、とくに九五年三月にローザと知りあってからは彼女ときわめて緊密な関係を結んでいた。[31] しかしヴォイナロフスカは先にもふれたように、ローザの考え方を全面的に支持していたわけではなく、むしろ各社会主義グループの協力を重視していたから、ローザがロンドン大会における在外労働者連盟の代表権をヴァルシャフスキに与えようとしたことに強く反発した。ヴァルシャフスキはすでにチューリヒ大会でPPSの攻撃をうけた人物であり、その後、彼の潔白が証明されたとはいえ、彼に代表権を与えることはPPSが再び紛議をかもす可能性があった。そこでヴォイナロフスカは、これ以上PPS、あるいは在外同盟との関係が悪化することを恐れ、折からパリに来ていたSDKPの創立者の一人グートマイヤー（S. Guttmayer）とともに、在外労働者連盟の幹部を退くとしてローザにその撤回を迫った。これに対してローザは、十日後に迫ったロンドン大会を考慮してやむなく譲歩し、ヴァルシャフスキには『スプラヴァ・ロボトニチャ』の代表権を与えることでこの件は落着した。[32] しかし両者は大会に提出されるべき決議案についても意見の対立を見せていた。ヴォイナロフスカはポーランドの独立を要求したPPSの決議案を認めようとしていたが、もちろんこれはローザの容れるところではなく、ヴォイナロフスカは不本意ながらローザの起草

した決議案に同意せざるを得なかった。かつてローザがパリに滞在した時、日常生活にうといローザの「守護神」として彼女と親しんできたヴォイナロフスカも、もはやそのような存在ではなくなっていたのである。[33] この間、ローザはパリでフランスの社会主義者らと接触する一方、予めロンドンに派遣していたヴァルシャフスキらの情報に基づいて大会での支持を獲得するために奔走した。彼女の活動はヨギヘスにあてた手紙によってもうかがえるが、注目すべきことは手紙の各所にベルンシュタイン（E. Bernstein）の名前が見出されることであろう。[34] とくにベルンシュタインがヴァルシャフスキに対して、「わたしたち〔SDKP〕の綱領がまったく正しく、……社会愛国主義者どもは結局わたしたちの立場に移らざるをえないということがわかった」[35] と語ったという情報は、ローザの関心をひかずにはいなかった。それはローザがロンドンに到着した日に、翌朝早々に彼を訪問する予定を立てていたことや、[36] 一方でSDKPの決議案に関心をもとうとしないリープクネヒト（W. Liebknecht）を「俗物」[37] とまでよんでいることによっても明らかである。周知のようにローザはやがてベルンシュタインと修正主義論争を展開することになるが、ポーランド問題に関するかぎり、彼らの意見が一致していたことはきわめて興味深い。

PPSとローザがそれぞれの思わくをもって迎えたロンドン大会は九六年七月二十七日に開かれたが、大会はポーランド問題について紛糾することを避け、PPSおよびこれに反対するローザのいずれの決議案をもしりぞけ、七月三十日午後、独自の決議案をほとんど満場一致で採択した。

「本大会は宣言する。本大会は、すべての民族の完全な自決権を支持し、現に軍事的、民族的あるいはその他の圧制の抑圧に苦しむあらゆる国の労働者に共感をよせる。本大会は、これらすべての国の労働者に、全世界の階級的自覚をもつ労働者の隊列に加わり、彼らとともに国際資本主義に勝利し、かつ国際社会主義の諸目標を実現するために闘うことを要請する、と。」[38]

この決議は民族の自決権を承認したものであったから、PPSと在外同盟にとっては、たとい一ポーランドの独立という具体的な表現を欠くにせよ、少なくとも部分的な成功と考えることができるはずであった。しかし彼らの内部での反応はきわめて微妙で、むしろ全体としては失敗であっ

たとする雰囲気が強かったといわれる。[39] とすれば、大会の結果はローザの見解が敗北を蒙ったというよりも、PPSの決議案を葬ったという意味で、ローザが勝利を収めたというべきであろう。[40][41]

とはいえ、ロンドン大会を前にしてひきおこされた在外労働者連盟内部の確執は、ローザの理論とも関連していただけに、その後、むしろ溝を深めることとなった。本来、ローザは在外労働者連盟をロンドン大会の代表権を確保する手段として重視していたのであったが、一方のヴォイナロフスカはこの組織を強化して運動を発展させようとし、ヨーロッパの諸都市や、アメリカ合衆国にまでその支部を設立した。このような経過はおのずから組織内でのヴォイナロフスカの地位を高め、在外労働者連盟はもはやローザの意志を尊重する組織ではなくなっていた。『スプラヴァ・ロボトニチャ』誌がロンドン大会後まもなく停刊を余儀なくされたのも、このような事情と関連していたことは疑いない。もちろん両者の確執はなおしばらくの間、決定的な段階を迎えるまでには至らなかった。しかしヴォイナロフスカを中心とする内部反対派の勢力はその後も確実に強化されていったのである。[42] しかもこの間、ローザの僚友はそれぞれの理由からドイツへ移住していた。[43] 彼らがローザにドイツへの移住を勧めたことは十分に想像されるが、非合法活動を続けながら党の再建をめざしていたヨギヘスだけは動こうとはせず、そのうえローザがドイツ化することを恐れて移住に強い難色を示していたのであった。[44] とすれば、在外労働者連盟に対するローザの失望は、移住の一つの要因とはなり得ても、移住を決断する直接的な契機とはならなかったのではあるまいか。[45]

三、プロイセン領ポーランド社会党の動き

ここでローザが移住することになるドイツの、とくにプロイセン領ポーランドの情勢に目を向ける必要があろう。一八九〇年当時、プロイセン領ポーランドには約二八七万人の「ポーランド語を使用する者」が住んでいたが、この数字はプロイセンの総人口の約一〇・九パーセントに当り、なかでもポーゼンとオーバーシュレージエンでは人口のほぼ六〇パーセントが彼らによって占められていた。[46] したがってこれらの地方では明らかに民族問題が存在し、ドイツの社会主義者のなかにも早くからこれに注目してポー

ランド人の支持をどのようにして獲得するかに関心をよせる者もあったが、社会主義者鎮圧法のもとではほとんど実際的な活動が行なわれていなかったというのが実情であった。[47] 一方、ポーランド人社会主義者の側では、一八八一年以後、スイスに亡命していたグループが二度にわたってポーゼンで啓蒙活動を行なったが、そのつど警察の介入をうけて失敗し、また八五年のポーランド人追放令に始まる政府の一連の抑圧政策も一時はポーゼンにおける彼らの運動に有利に作用するかに思われたが、これも指導者カスプシャク (M. Kasprzak) の逮捕によって挫折していた。[48]

しかし一八九〇年一月、ドイツ帝国議会が社会主義者鎮圧法の延長を否決した（同法は九月に失効）ことは、彼らの運動に一つの転機をもたらすこととなった。とはいえ、ポーランド人の居住地域はいぜんとして中央党やカトリック教聖職者の牙城であり、また官憲の対応も実際には同法廃止以前とほとんど変わらなかったから、SPDもこれらの地域に関するかぎり、新しい情勢を十分に生かしきることができなかった。そこでSPDは、当面、帝国内の都市、とくにベルリンに住むポーランド人を対象に活動を展開することとし、ポーランド人社会主義者との接触を深めるようになった。当時ベルリンには、メンデルソンらパリの亡命者や会議ポーランドの組織と連絡のある社会主義者のグループが組織されており、すでに八七年二月の帝国議会選挙には、恐らくパリからの資金の援助をうけてヤニシェフスキ (J. K. Janiszewski) をポーゼンから立候補させていたが、九〇年十二月には家具職人モラフスキ (F. Morawski) らを中心として手工業者や労働者に支持されたポーランド社会主義者協会が成立していた。しかし彼らは自ら機関紙を発行しうる力に欠けていたので、SPDは彼らに指導部の資金を提供し、九一年一月のポーランド語の週刊紙『ガゼタ・ロボトニチャ (Gazeta robotnicza 労働者新聞)』の発行（一、二〇〇部）を援助したが、これは当時の両者の関係を示すものであった。それとともに「宣伝および新聞委員会」も作られ、ポーランド人社会主義者自身の活動もしだいに活発となった。協会が短期間に会員二〇〇人を擁する組織に発展したことは、このことを裏書きしているであろう。[49]

この間、ポーランド人をとりまく状況も一時的とはいえ変化し始めていた。それはロシアとフランスの接近という情勢のなかで、九〇年三月、新宰相に就任したカプリーヴィ (L. von Caprivi) がビスマルクの政策を転換させ、ポー

ランド人に対する融和政策をとったからである。[50] これを利用してポーランド人社会主義者はベルリンにならってハンブルクやブレーメンなど多くの都市に組織を作り、ポーゼンでも八〇年代の運動を継承する形で新しい細胞が組織されたが、その場合、彼らの活動はSPDの活動の一部と見なされることが多かったので、ポーゼンなどではポーランド人の民族感情やカトリック教徒の宗教感情などの抵抗に出あい、必ずしも十分な成果を収めることができなかった。[51] しかし、九二年に在外同盟が結成され、さらに翌年、PPSが組織されると、その刺激をうけたポーランド人社会主義者は、同年夏以後、在外同盟のメンバーと接触を始め、またベルリンのポーランド社会主義者協会もSPDの代表者と予備的な会談を行なって綱領や規約についての審議に入るなど、あわただしい動きを示すようになった。それをうけて『ガゼタ・ロボトニチャ』や協会の宣伝委員会は、「ドイツ在住ポーランド人社会主義者会議」の開催をよびかけ、その結果、九三年九月十日、プロイセン領ポーランド社会党(Polska Partia Socjalistyczna zaboru pruskiego)〔以下、プロイセン領PPSと略記〕が成立し、『ガゼタ・ロボトニチャ』がその機関紙となったのである。その際、注目すべきことはプロイセン領PPSの指導権がその成立過程からも推察されるように、ポーランド社会主義者協会や在外同盟のメンバーによって握られていたということであろう。にも拘らずプロイセン領PPSは、その設立の理由をドイツ国内のポーランド人労働者の特別な諸関係においていた。それは、彼らがSPDの手先にすぎないとするポーランド人民族主義者の非難をかわし、同時にSPDにも自立的な党の必要性を認めさせようとする意図に基づいていたからである。しかしプロイセン領PPSは、原則としてSPDの綱領を承認し、代議員をSPDの党大会へ派遣することになっていたとはいえ、独自に大会を開き、指導部を選ぶことができたのであったから、制度的に見れば明らかに自立的な性格をそなえていた。[52] ローザが喝破したように、「ある政党から脱退しておきながら、同時にその政党にとどまろうとすること、あるいは同じことであるが、自分が所属していない政党の党大会に代議員を派遣しようとすることはもともと不可能なこと」[53] なのであった。したがってSPDの内部でこの点についての疑義が生じたのは当然であったが、リープクネヒトらSPDの指導部はプロイセン領PPSをSPDの下部組織として位置づけ、

この枠のなかで彼らの自立性を承認していたにすぎなかった。一方、プロイセン領PPSも、SPDから財政的援助をうけていたので、SPDの解釈にあえて異をとなえることはせず、むしろ意識的にSPDとのあいまいな関係を維持しようとしていたのである。[54]

このような関係は、九四年に会議ポーランドでSDKPが成立し、PPSのポーランド再建の綱領を激しく攻撃したこと、また、同じ年にドイツ帝国でホーエンローエ(C. Hohenlohe-Schillingsfürst)が宰相に就任し、ポーランド人に対する政策を再び転換したこと、[55]などによって、プロイセン領PPSの自立的傾向が強められたとはいえ、基本的にはいぜんとして変わらなかった。しかしこの関係に大きな影響を与えたのは、カウツキーが九六年のロンドン大会との関連で『ノイエ・ツァイト』に論文を寄せ、ローザを批判しつつ、大会はポーランド人が独立の要求を堅持して闘っていることを示す輝かしい機会である、と主張したことであった。[56]これはSPDが民族問題、具体的にはプロイセン領PPSに対してどのような態度をとるべきかを改めて問うものであったが、SPDの内部では、現状に何ら変更も加える必要はないとするアウアー(J. Auer)らの実践派が多数を占め、カウツキーの見解にむしろとまどいと反発を示したにすぎなかった。[57]これに対してプロイセン領PPSは、カウツキーの見解に触発されて公然と独立ポーランドの要求を前面に掲げ、『ガゼタ・ロボトニチャ』もロンドンの在外同盟からのさまざまな働きかけをうけて、[58]ますますローザのいう「社会愛国主義」の傾向を強めていった。それを象徴する事件がカスプシャクの除名であった。彼はローザのスイス亡命を援助した人物で、逮捕、脱走をくりかえした後、九六年三月以降、ブレスラウにとどまり、プロイセン領PPSに加わっていたが、ロンドン大会を前に、彼を中心とするポーゼンの社会主義者はローザの見解を支持して彼女に代表権を与えていたので、PPSが大会に提出した決議案に強い不満を抱いていた。そこでカスプシャクは『ガゼタ・ロボトニチャ』に抗議文を送り、ロンドン大会の前に党大会を開いて決議案を討議するよう要求したので、以後、彼は党内で苦しい立場に立たされることとなった。しかし彼はなお独自に労働者を組織して活動を続けたため、在外同盟の影響をうけていた党幹部から「ローザ・ルクセンブルクの反民族的傭兵」とされ、九七年六月の党大会を機に除名されたのであった。[59]ロ

ンドン大会の前後におこったこの事件の経過は、会議ポーランドにおけるPPSとSDKPの対立がそのままドイツにもち込まれたものであったから、ローザにとっては、単に古くからの同志がおとしめられたというだけのことではなかった。カスプシャクが除名された時点では、ローザはすでにドイツへの移住を決断していたが、それまでの経過がローザに大きな刺激を与えていたことは疑いないと思われる。

カスプシャクが国際主義の立場に立ってプロイセン領PPSを批判したのに対し、ポーランド人の「ドイツ化」というSPDの指導部の期待をになって、九七年四月以降、オーバーシュレージエンで精力的に活動していたのがヴィンター(A. Winter)であった。彼は言語学および哲学を修めたジャーナリストであったが、アウアー同様、民族ポーランドなる合言葉に早くから強い反感をもち、プロイセン領PPSや『ガゼタ・ロボトニチャ』に痛烈な批判を浴びせていた。彼によれば、ポーランド人の組織はSPDの活動家にとって困難な言語の障壁をとり除くための存在にすぎず、また経済的に不可避なゲルマン化もそれ自体は非難されるべき性質のものではなく、その間に存在する問題(プロイセン的、警察的形態)はドイツの国民教育を通じて解決されるはずのものであった。[60] したがってヴィンターの活動は、プロイセン領PPSへの対応に苦慮し始めていたSPDの指導部にとって、きわめて時宜にかなったものであった。[61] そこでSPDの指導部はヴィンターの提言にしたがい、九七年夏、ベルリンでプロイセン領PPSの指導部と会談し、翌年の帝国議会選挙の立候補者問題について協議したが、その際、SPDはボイテン・タルノヴィッツ地区でポーランド人候補者一名を認めたにとどまり、これに対するプロイセン領PPSの抗議には露骨な反応さえ示したのであった。[62] プロイセン領PPSのこの不満は、同年十月のSPDのハンブルク大会で噴出した。大会で彼らは議事日程に組まれていなかった候補者問題をとりあげたが、「われわれはわれわれの組織の内部で、ただドイツ社会民主党を知るのみ」とするSPDの中央集権的組織観に阻まれ、結局、なすところなく終り、さらに九八年一月の両党の交渉でも、プロイセン領PPSは財政援助の停止を前面に出して二者択一を迫るSPDの態度を崩すことができなかったのである。[63] とはいえ、プロイセン領PPSの自立への要求は、下部からの不満や在外同盟の影響のなかでま

すます増幅されつつあった。それはローザにすれば、「社会愛国主義」の汐流をいっそう強める以外の何ものでもなかった。すでに会議ポーランドではSDKPの組織は壊滅しており、またヴォイナロフスカとの溝を深めつつあったローザにとって、このような状況をかかえるドイツはまさに残された唯一の戦場であったといえよう。この地でプロイセン領PPSに断固として立ち向い、ポーランド人労働者を自らの側へ獲得することこそ、彼女の「仕事」であるはずであった。ローザが移住の決断を下した時期は、すでに述べた諸状況がドイツで顕在化しようとしていた時期であり、また「いまは自分の仕事を最後までやり遂げることをめざしています」という文面も、このように読みとるのがもっとも自然であるように思われる。

結びにかえて

ローザのドイツへの移住について、多くの伝記その他は程度の差はあれ、会議ポーランドでの活動が不可能になったこと、チューリヒ大学に学位論文の提出を終えていたこと、ドイツには国際労働運動の中心であったSPDが存在していたこと、プロイセン領ポーランドが活動の舞台を提供していたこと、などをその動機としてあげている。[64] これらの説明はいずれも妥当なものであり、またそのそれぞれが相互に関連しあっていることはいうまでもない。またそれ以外にも、すでに述べたSDKP内部の対立、とくにヴォイナロフスカとの関係をつけ加える必要もあるように思われる。本稿では、これらの説明のうち、とりわけプロイセン領PPSの動きを重視したいのであるが、いずれの説明に力点をおくにせよ、ローザの主体性を埋没させて考えることは誤りであろう。

その点で注目されるものが、ローザのベルリン到着後まもない五月二十四日のアウアーとの会談であった。会談でローザは、「ポーランド人の運動にうんざりして」いるアウアーの愚痴にも似た話を聞きながら、「この問題については、わたしはあなたよりもずっとよく承知しています」といい切って彼を翻弄したあと、自らオーバーシュレージエンでの遊説を申し出て彼を喜ばせるのであるが、[65] SPDの幹部を相手に会談の主導権を完全に握ったローザの姿はまさに圧巻というべきであろう。もちろんローザにとってもベルリンやドルトムントなど活動しやすい都市での登場

は望ましいことであった。しかしこれらの都市ではポーランド人の問題はそれほどの意味はなく、むしろSPDがもっとも困惑している場所こそ、ローザの活動舞台でなければならなかったのである。[66] オーバーシュレージエンに赴くと、ローザはヴィンターと協力しつつ精力的に活動を続けた。それはヨギヘスへの手紙からも明らかに読みとることができるが、その際、ローザがヴィンターと協力したのは、彼の考え方を支持していたからではなく、[67] SPDがもっとも拘泥していた組織の中央集権的統制を利用することによって、プロイセン領PPSの自立を阻もうとしていたからであった。ローザがカスプシャクと連絡をとりあって、彼をこの仕事に加えようとしていたことは、ローザの意図が奈辺にあるかを物語っているように思われる。しかもここでの活動は、ローザ自身がポーランド人労働者との直接的関係を作りあげ、党大会への代表権を確保することにもつながっていた。[68] この図式をさらに拡大して考えるならば、ローザはSPDを動かし、さらにそれを通じて第二インターナショナルに支配的であった伝統的なポーランド観に影響を与えようとしていたと見ることもできるのではあるまいか。[69]

それにしてもローザは、しばしばいわれるような社会主義運動の国際的舞台への登場という言葉とはうらはらに、重苦しい気持を抱いてドイツへ移住した。それはヨギヘスとの個人的な事情によることはもちろんであろうが、ローザが目のあたりに見たベルリンの「冷い、わたしなどを歯牙にもかけないような力強さ」[70] から受ける印象も少なからず影響していた。ローザはくりかえしヨギヘスに、「ベルリンとドイツを憎みます」[71] と書き送るのであるが、それはあながち移住に難色を示したヨギヘスの気持を忖度しただけのことではなかった。事実、ローザは時に、スイスのどこかでヨギヘスとつつましやかに暮す幸福を夢見るのであるが、彼女にとっては「仕事が唯一のもの」[72] であり、そしてその「仕事」は、在外労働者連盟の「アウゲイアスの牛舎（Augiasstall）」での仕事よりもはるかに価値のある仕事と考えられたからである。[73]

注

(1) J. P. Nettl, *Rosa Luxemburg*, London 1966, Vol. I, P. 107, n. 1.（ネットル『ローザ・ルクセンブルク』諫山正・川崎賢・宮島直機・湯浅赳夫・米川紀夫・共訳、河出書房新社、一九七四年、上巻、一一八頁、四八七頁）。

(2) ローザ・ルクセンブルク『ヨギヘスへの手紙』(ティフ編)伊藤成彦・米川和夫・阪東宏訳、河出書房新社、一九七六年、第一巻、一五〇—一五一頁〔以下、『手紙』と略記〕。なお、本稿では、原則としてこの訳文に依拠したが、その一部については、Rosa Luxemburg, *Gesammelte Briefe*, Bd. 1, hrsg. vom Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Berlin 1982.〔以下、*Gesammelte Briefe* と略記〕を参照して改訳を試みた。

(3) 『手紙』、一七八頁。

(4) 加藤一夫「ポーランド王国社会民主党の形成」『西洋史学』一〇八号、一九七七年、三一—四四頁、はSDKPの歴史を検討しつつ今後の研究の問題点にふれた労作である。

(5) Rosa Luxemburg, "Der Sozialismus in Polen", in: Rosa Luxemburg, *Gesammelte Werke*, Bd. 1-1, hrsg. vom Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Berlin 1974〔以下、*Gesammelte Werke* と略記〕, S. 87.(ローザ・ルクセンブルク「ポーランドにおける社会主義」『マルクス主義と民族問題』丸山敬一訳、福村出版、一九七四年、一三九頁)。

(6) Georg W. Strobel, *Die Partei Rosa Luxemburgs, Lenin und die SPD. Der polnische „europäische" Internationalismus in der russischen Sozialdemokratie*, Wiesbaden 1974, S. 71.

(7) Ulrich Haustein, *Sozialismus und nationale Frage in Polen. Die Entwicklung der sozialistischen Bewegung in Kongreßpolen von 1875 bis 1900 unter besonderer Berücksichtigung der Polnischen Sozialistischen Partei* (*PPS*), Köln 1969, S. 102-118, S. 193. ポーランド労働者同盟が当時ワルシャワで多くの青年や労働者に大きな影響を与えていたことは、政治的立場の異なるヨットコーナルキェーヴィチ(W. Jodko-Narkiewicz)のメンデルソン宛ての手紙によっても知られる(ebenda, S. 103.)。また同盟が会議に代表を送ることができなかったのは弾圧による結果で、一応グラブスキ(S. Grabski)が同盟を代表していたが、彼はまもなく国際主義を離れたから、事実上、同盟の代表は参加していなかったと見てよい(ebenda, S. 108.)。

(8) Ebenda, S. 137 f.; Strobel, a. a. O., S. 73.

(9) マルフレフスキ(J. Marchlewski)の活動のほか、在外同盟の主導権を握っていた知識人に対する労働者の反発が作用していたといわれる(ebenda, S. 74.)。

(10) Haustein, a. a. O., S. 141 f.; Strobel a. a. O., S. 75.

(11) "Politische Aufgaben der polnischen Arbeiterklasse", in: Georg W. Strobel, *Quellen zur Geschichte des Kommunismus in Polen 1878-1918*, Köln 1968〔以下、*Quellen* と略記〕, S. 180, Dok. 15. この声明のなかでローザは、ツァーリズムが労働運動にとって最大の障害物であり、これをとり除かねばならないこと、ロシアの労働者は兄弟であり同志であって、共同の敵に対して一致して戦うであろうこと、われわれは普通選挙権や、ストライキ・結社・集会・出版などの自由をかちとるために闘争の旗じるしを高く掲げていること、われわれのさし当っての政治的課題は、全国民によって選ばれる政府の樹立であること、などを強調していた。

(12) "Erklärung über die Gründung der Sozialdemokratie des Königreiches Polen (SDKP)", in: *Quellen*, S. 183, Dok. 16. この集会には同誌のグループのヴァルシャフスキ(A. Warszawski) の妻もパリから参加してきており、両者の関係が密接になりつつあったことをうかがわせる(vgl. Strobel, a. a. O., S. 75.)。

またローザはマルフレフスキを通じてワルシャワのポーランド労働者同盟のグループとの結びつきをもっていたといわれる(ebenda, S. 81.)。

(13) この報告書「一八八九—一八九三年のロシア領ポーランドにおける社会民主主義運動の立場と経過について」("Bericht an den III. Internationalen Sozialistischen Arbeiterkongreß in Zürich 1893 über den Stand und Verlauf der sozialdemokratischen Bewegung in Russisch-Polen 1889-1893", in: *Gesammelte Werke*, Bd. 1-1, S. 5-13.) と関連して、ローザはすでに同年四月十五日、ヨギヘスに宛てて、「……もっと正確な名前、つまり〈王国社会民主党〉という名前に変えることです。……大会への報告の中でも、われわれが〈王国社会民主党〉である……ことなどを述べておきましょう。あちらの人たち〔ポーランド王国内の社会民主主義者〕と話し合いをつけておけば、わたしたちがこうすることの権利を十分に認めてくれるものと思います。」(『手紙』、六一頁) と記していた。また、本国の組織も八月に結ばれた協定の本文のなかでこの党名を用いている。

(14) *Protokoll des Internationalen Sozialistischen Arbeiterkongresses in der Tonhalle Zürich vom 6. bis 12. August 1893*, hrsg. vom Organisationskomitee, Zürich 1894, S. 14 f. 大会での票決は民族別に行なわれ、九対七、棄権三の結果となった。しかしマルフレフスキは

ワルシャワの社会民主主義グループを代表するものとして代表権を承認されている（ebenda, S. 61.）。

(15) Strobel, a. a. O., S. 92.

(16) "Vertrag zwischen der »Sprawa robotnicza«-Gruppe und der Landesorganisation der SDKP", in: *Quellen*, S. 183, Dok. 17. 協定は、綱領や政治路線などの変更については組織の承認を必要とすること、少なくとも半年に一度、両者の代表が協議すること、など五項目から成っている。

(17) Strobel, a. a. O., S. 101 f.

(18) "Beschluß des I. Kongresses der Sozialdemokratie des Königreiches Polen über die Unabhängigkeit Polens", in: *Quellen*, S. 188 f., Dok. 20. 決議は三月十一日に採択された。この結論は、ポーランド王国のプロレタリアートの直接的な任務がツァーリズムの打倒と、できる限り広範な憲法の獲得にあること、またポーランド国家再建の綱領は、今ではユートピアというべきで、ロシア国家の内部でプロレタリアートを分裂させ、ショーヴィニズムと民族抗争を不可避的なものにすること、などをその根拠としていた（vgl. Haustein, a. a. O., S. 182 f.）。

(19) Strobel, a. a. O., S. 98 f.

(20) 『手紙』、八九頁、一八九四年三月二十八日付。

(21) Strobel, a. a. O., S. 106 f. なお、PPSはヴォイチェホフスキ（Wojciechowski）らによって会議ポーランドの各地に組織を作り、九四年二月、ワルシャワで第二回党大会を開くまでになっていたが、SDKPとの勢力関係については十分に知られていない（Haustein, a. a. O., S. 158 ff., S. 185.）。

(22) "Statut der Arbeiterberufsverbände der SDKP", in: *Quellen*, S. 191 f., Dok. 22.

(23) Strobel, a. a. O., S. 108.; vgl. Haustein, a. a. O., S. 183.

(24) "Erklärung über den Beitritt der SDKP-Organisation zur PPS", in: *Quellen*, S. 193, Dok. 23.

(25) Haustein, a. a. O., S. 184.

(26) *Gesammelte Briefe*, Bd. 1, S. 81 f. なお、ルイーゼ・カウツキー編『ローザ・ルクセンブルクの手紙』川口洋・松井圭子訳、岩波書店、昭和五〇年、二六頁以下。

(27) この前後の経過を述べたものに木村真樹男「ローザ・ルクセンブルクと『ポーランド問題』」『紀要』（早大大学院文学研究科）別冊一、一九七五年、がある。また、ローザの民族問題についての理解をとりあげたものに、伊東孝之

「東欧の民族問題とマルクス主義の民族自決権概念――ローザ・ルクセンブルク――」『スラヴ研究』第十八号、一九七三年、丸山敬一「ローザ・ルクセンブルクとポーランド問題」『法学雑誌』第二十一巻、一九七四年、大野節夫「民族と階級との関連について(1)」『経済学論叢』第二十三巻、一九七五年、荒木勝「ローザ・ルクセンブルクのポーランド民族自治論に関する一考察」『法政論集』八〇号、一九七九年、などの手堅い論稿がある。

(28) "Programm und Zweck des》Vereins der polnischen Arbeiter-Sozialdemokraten im Auslande《", in: *Quellen*, S. 193, Dok. 24.

(29) Strobel, a. a. O., S. 112.

(30) 一八六一年、ポーランドの没落した地方貴族の家柄に生まれた女性で、始め医学を学んでいたが、社会主義サークルに関係したことから、七九年以来、三たび逮捕され、八三年にスイスに亡命した。ここで彼女はプレハーノフ夫妻と親交を結んだが、その後、八九年、パリに赴き、亡命ポーランド人社会主義者の結束に努めた。彼女自身は本来、ポーランド労働者同盟を支持し、SDKPに参加した後も他の社会主義グループとの関係を維持しようとし、またフランスの社会主義者とも接触していた。彼女の政治的立場をよく示しているものに、九四年二月、在外同盟の代表者をも加えて設立した「赤い十字(Rotes Kreuz)」がある。この組織は、政治的立場を離れてすべての逮捕者や亡命者を救済しようとするもので、「革命的連帯万才」をスローガンとし、ヴァルシャフスキも幹部に名を連ねていた(ただし、のちに在外同盟がこの組織を自らの道具としようとしたため、ヴォイナロフスカ、ついでヴァルシャフスキもそれぞれ脱退した)。その後、彼女はローザとの溝を深めながらも、一九〇〇年以降、国際社会主義事務局(ISB)でポーランド王国・リトアニア社会民主党の代表者となっていたが、一九〇三年、ロシア社会民主労働党への加盟問題をめぐってローザと決定的に対立し、翌年には国際社会主義事務局の代表者から退いた。その後、彼女は要職につかず、一一年、パリで死亡した("Biographien führender Persönlichkeiten der Parteien", in: *Quellen*, S. 125.)。

(31) ローザはこのころのヴォイナロフスカとの関係について、例えば、つぎのように記している。

「〔パリでは〕アドルフ、ヤージャ、ヴォイナロフスカとグートマイヤー以外は――全部愛国派です。」(『手紙』、七〇頁、一八九四年三月十二日付)。

「ヴォイナロフスカがわたしのために彼女が住んでいる

家の一室を提供してくれるのです。……非常に気持のいい、誠実で知的な人です。」(『手紙』、一一二頁、一八九五年三月十八日付)。

(32) Strobel, a. a. O., S. 114. このほかローザは、ロンドンのポーランド・リトアニア社会主義協会(在外同盟からの脱退者が組織したものでSDKPに近い立場をとっていた)の代表権をマルフレフスキに与えようとしていたが、同協会がそれを拒否したため、彼には在外労働者連盟の代表権が与えられた(ebenda.,『手紙』、一六〇頁、一八九六年七月十五日頃)。また、ローザはこの件についての報告のなかで、「ツェザリーナ〔ヴォイナロフスカ〕がカッとなって……二者択一を迫っています」と記している(『手紙』、一六三頁、一八九六年七月十七日頃)。なお、ヴォイナロフスカの予想したように、ヴァルシャフスキの代表権は大会でPPSから異議が出され、一二対七で否決された(Haustein, a. a. O., S. 221.)。

(33) Strobel, a. a. O., S. 115, 117.

(34)『手紙』、一五二—一六九頁、一八九六年七月十二日付—二十一日付。

(35)『手紙』、一五八頁、一八九六年七月十三日付。

(36)『手紙』、一六八頁、一八九六年七月二十一日付。

(37)『手紙』、一五二頁、一八九六年七月十二日付。

(38) *Verhandlungen und Beschlüsse des Internationalen Sozialistischen Arbeiter-und Gewerkschafts-Kongresses zu London vom 27. Juli bis 1. August 1896*, Berlin 1896, S. 18.

(39) Haustein, a. a. O., S. 224 f. 阪東宏「社会主義と民族問題——一九世紀九〇年代の『曙光』(Przedświt)を中心に——」『駿台史学』第五十一号、昭和五十六年、六頁以下。

(40) レーニン「民族自決権について」『全集』第二十巻、四六二頁。

(41) Paul Frölich, *Rosa Luxemburg-Gedanke und Tat*, Frankfurt am Main 1967, S. 54. なお、ハンブルク版(一九四九年)を底本とする訳業では、パウル・フレーリヒ『ローザ・ルクセンブルク——その思想と生涯——』伊藤成彦訳、東邦出版社、一九六八年、がある。

(42) Strobel, a. a. O., S. 116 f.

(43) マルフレフスキは九六年夏にチューリヒでの研究生活を終えると、まもなくライプチヒへ去り、またヴァルシャフスキもパリでは孤立し、九七年にミュンヘンへ移っていた(vgl. Strobel, a. a. O., S. 119.)。

(44) ローザはのちヨギヘスに宛てて、「ご心配なく、わたしはここでドイツ化などしていないから。」と書き送っている(『手紙』、二〇八頁、一八九八年五月二十六日付)。vgl. Frölich, a. a. O., S. 57 f.

(45) 一八九七年七月十六日付の手紙(『手紙』、一七一―一七五頁)は、この年のものとしてただ一通残されているものであるが、日付から見て、ローザがすでに移住を決断した後の手紙である。その内容をどのように読みとるべきかはにわかに判断することはできないが、その苦渋に充ちた文面から推して、移住の問題がなお心の葛藤として残されているように思われてならない。

(46) Hans-Ulrich Wehler, *Sozialdemokratie und Nationalstaat. Nationalitätenfragen in Deutschland 1840-1914*. Göttingen 1971, S. 123, 251, 248 f.; vgl. Martin Broszat, *Zweihundert Jahre deutsche Polenpolitik*. München 1978, S. 145.

(47) Ebenda, S. 119-122. なお、阪東宏「社会主義運動と民族問題」『階級闘争の歴史と理論、第三巻』青木書店、一九八〇年、は、行論のなかでヴェーラーの著書を紹介しつつ、民族問題について適切な指摘を行なっている(一五一―一五九頁)。

(48) Haustein, a. a. O., S. 125-128. なお、八〇年代の政府のポーランド人政策については、Ernst Rudolf Huber, *Deutsche Verfassungsgeschichte seit 1789*, Bd. IV, Stuttgart/Berlin/Köln/Mainz 1969, S. 485-493. 伊藤定良「帝国主義形成期ドイツにおけるポーランド人問題」『階級闘争の歴史と理論、第三巻』青木書店、一九八〇年、一七八頁以下。

(49) Wehler, a. a. O., S. 124 f.; vgl. Haustein, a. a. O., S. 128 f.

(50) Huber, a. a. O., S. 496-498. 一八九一年四月以後、学校における言語政策を緩和し、またビスマルク時代の植民法(一八八六年四月)を継続していたとはいえ、九二年にはポーランド人の協同組合や土地信用銀行に大幅の権限を認めてポーランド人の利益を保証した。

(51) Wehler, a. a. O., S. 126 f.

(52) Ebenda, S. 131 ff.

(53) Rosa Luxemburg, "Neue Strömungen in der polnischen sozialistischen Bewegung in Deutschland und Österreich", in: *Gesammelte Werke*, Bd. 1-1, S. 34 f. (ローザ・ルクセンブルク「ドイツおよびオーストリアにおけるポーランド社会主義運動の新しい潮流」丸山前掲邦

訳書所収、一〇三頁)。

(54) Wehler, a. a. O., S. 133.

(55) Huber, a. a. O., S. 498 f. その背景には、カプリーヴィの融和政策に対するビスマルクやドイツ保守党の激しい攻撃、および東部辺境協会(Ostmarkenverein)などの圧力が存在した。vgl. Wehler, a. a. O., S. 136 f.

(56) Karl Kautsky, "Finis Poloniae?", in: *Die Neue Zeit*, 14 Jg. 1895-96 Bd. II, S. 521-525.

(57) アウアーは、当時、SPDの指導部で書記の地位にあったが、七月、カウツキーに抗議の手紙を送り、ポーランドの再建に冷やかな態度をとっていることを伝えた(Wehler, a. a. O., S. 139 f.)。

(58) すでに一八九四年、『ガゼタ・ロボトニチャ』は在外同盟から月々一、〇〇〇マルクの援助をうけていた(Wehler, a. a. O., S. 136.)。また、ローザに対してアウアーは、プロイセン領PPSが在外同盟やメンデルソンの働きかけをうけていることを指摘している(『手紙』、二〇一頁、一八九八年五月二十五日付)。

(59) Haustein, a. a. O., S. 266.; vgl. Wehler, a. a. O., S. 143.

党大会でカスプシャクは党の綱領に対する信条の告白を要求され、彼は一応それに従ったが、党の指導部に対する批判は撤回しなかった。また、大会で指導部がプロイセン領PPSを批判したローザの論文を掲載した『ザクセン労働者新聞』に抗議しようとした時、彼は署名を拒否して退場し、これが除名の直接的な原因となった。

(60) Wehler, a. a. O., S. 142 f.; vgl. August Winter, "Der Parteizwist in Preußisch-Polen", in: *Die Neue Zeit*, 20 Jg. 1901-1902 Bd. II, S. 731 ff.

ヴィンターはこの論文で、彼がオーバーシュレージエンに赴いたのは党の委託によるものではないとし、またプロイセン領PPSをSPDの「宣伝委員会」として位置づけ、同党の自立は混乱を招くものとしている。

(61) のちローザは、このことについて、つぎのように記している。「ヴィンターはかれら〔アウアーら〕のところでは全面的に好ましい人物とされています。概してポーランド人の運動というのは、かれらにとってはヴィンターのことなのです。PPS〔プロイセン領の〕についてかれらは何も知らず、それには関心をもっていません。」(『手紙』、二〇二頁、一八九八年五月二十五日付)。

(62) Wehler, a. a. O., S. 144 f.

(63) Ebenda, S. 145 ff. なお、この前後の経過については、

神代光朗「ドイツ社会民主党のポーランド論争（一八九七年―一九一三年）におけるローザ・ルクセンブルクの立場」『三田学会雑誌』第七一巻五号、一九七八年、がある。

(64) 一例として Annelies Laschitza u. Günter Radczun, *Rosa Luxemburg. Ihr Wirken in der deutschen Arbeiterbewegung*. Frankfurt am Main 1971, S. 15 ff. またフレーリヒやネトルも前後の叙述から見て、ほぼこのような見解にまとめることができるであろう。また、雑誌論文の一例としては、Jan Kancewicz, "Rosa Luxemburg—eine glühende Internationalisten", in: *Beiträge zur Geschichte der Arbeiterbewegung*, XIII. 1971-3, S. 400.

(65) 『手紙』、二〇一―二〇二頁、一八九八年五月二十五日付。

(66) 『手紙』、二〇九―二一〇頁、一八九八年五月二十八日付。

(67) 『手紙』、二二八頁、一八九八年六月二十一日付。

(68) 『手紙』、二一七頁、一八九八年六月三日付。二一〇頁、一八九八年五月二十八日付。

(69) Vgl. Frölich, a. a. O., S. 57; Strobel, a. a. O., S. 120.

(70) 『手紙』、一八三頁、一八九八年五月十七日付。

(71) 『手紙』、一八〇頁、一八九八年五月十六日付。二〇八頁、一八九八年五月二十六日付。

(72) 『手紙』、一八五頁、一八九八年五月十七日付。

(73) Strobel, a. a. O., S. 120.